園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2026年5月



●今月は保護者会が行われます。そこではお子さまの保育園での姿と今年度のねらいを各クラス担任よりスライドや動画交えながらお伝えします。また保護者さま同士・担任との懇談の時間もご用意します。そして私からも少々お時間をいただき、園の理念や事業計画についてお話をさせていただきます。なぜなら私たちがこの保育園でどんなことを大事にし、子どもたちとどのように関わっているかについて、まずは保護者さまに知っていただくことが、お子さまにとっての最善の利益に資すると考えているからです。

●今さら申し上げるまでもないことではありますが、私たちはお子さま一人ひとりを無為にお預かりしているわけではありません。保育園が「**子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期にその生活時間の大半を過ごす場**」（保育所保育指針第1章）であることに、そこに携わる保育者として重い責任を感じながら日々保育を行っています。同時に、OECD（経済協力開発機構）が「**質の高**

い幼児教育・保育が子どもの生涯にわたる学力、社会情緒的スキル、健康に持続的な好影響を与え、将来の格差を是正する費用対効果の高い投資である」と指摘しているように、乳幼児期の教育・保育の有効性や可能性に大きな期待とやりがいを持たせていただいています。

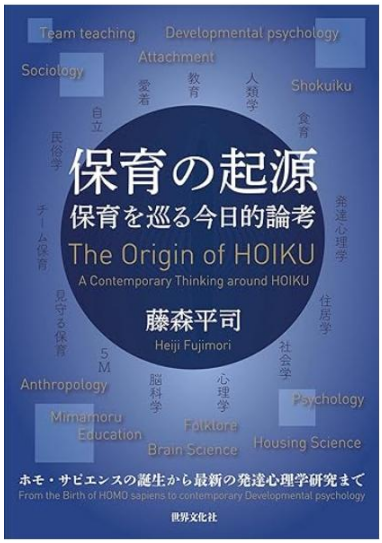




●今回の保護者会で私からは、この質の高い幼児教育（保育）とは何かについて考えを述べさせていただく予定です。そのうえで今月号のコラムでは、なぜ今世界中で幼児教育がこれだけ注目されているのか、その理由を作ったとも言えるジェームズ・ヘックマンの研究について、主に藤森平司氏（保育環境研究所ギビングツリー主宰）の著書『保育の起源』（世界文化社）を参照しながら紹介いたします。







＜教育を『投資』と捉えた場合の年齢別投資対効果＞

●ジェームズ・ヘックマンは、アメリカ合衆国シカゴ大学の経済学者です。2000年にノーベル経済学賞を受賞した彼の研究はとても有名で、幼児教育の世界に大きな影響を与えました。

●彼の著書「幼児教育の経済学」によれば、「労働経済学の分野では教育を『投資』として捉え、どのような教育投資を行えば効果的に所得や労働生産性を上げられるかが労働経済学者の関心事」だと言います。

●そこでまず初めに行われたのが、若年失業者（成人）を対象とした職業訓練の教育投資効果の研究でした。しかし研究の結果わかったのは**「失業者訓練は、教育にかけた公的なコストに比べて、得られる効果はそれほど大きくない」**というものでした。

●また、同様の結果は学校教育でも見られました。アメリカではマイノリティの経済的貧困が社会問題となっており、その所得格差の大きな要因を「学歴の違い」と考え、マイノリティの大学進学率を高めるための様々な補助政策が行われました。当然、高等教育へ大きく投資されましたが、**高等教育への投資は教育投資効果が低い**ことが分かったそうです。大学段階での教育投資が遅いのなら、**高校段階や小・中学校段階ではどうか**と研究対象を遡りましたが、いずれの段階でも**十分な効果は表れていない**ということが明らかになりました。つまり、所得階層別の学力差はすでに 6 歳の就学時点から生じており、この差は就学後にさまざまな教育投資を行っても容易に縮まらなかったことを意味しています。

＜ペリー就学前プロジェクトと幼児教育の有効性＞

●そこで、ヘックマンは就学前の子どもに対する教育投資効果に着目し、「**就学後の教育の効率性を決めるのは就学前の教育にある**」と主張しました。その根拠となったのが、アメリカで1960年代から

実施された「ペリー就学前プロジェクト」と言われる比較実験です。これは、当時ペリー小学校付属幼稚園に通っていた幼児123名を対象に、就学前教育を受けた人・受けなかった人に分け、それぞれ40歳に達するまで定期的に追跡調査を行ったというものです。

●結果は次のような興味深いものになりました。

就学前教育を受けた人たちは、受けなかった人たちに比べ、

- ☑ 高校卒業資格を持つ人の割合が20%高い
- ☑ 5回以上の逮捕歴を持つ人の割合が19%低い。
- ☑ 月収2000ドルを超える人の割合が約4倍である
- ☑ マイホームを購入した人の割合が約3倍である

●このように**大人になってからの経済状態や生活の質を高める上で、就学前教育が有効である**ことをヘックマンは実証したのです。

＜「有効」な「就学前教育」とは何か＞

●この研究で私が最も気になったのは、同プロジェクトの就学前教育で施された内容と、実際に就学前教育（幼児教育）の効果が最も顕著に表れたのはいったいどのような分野だったのかについてです。

＜幼児教育と認知能力（IQ）の相関は低い＞

●意外なことに、IQを長期的に高めることにおいては就学前教育による特段の効果は認められなかったと結論づけています。調査結果によると、指導した直後には一時的にIQが上がっても、小学3年生の時点でその差はほぼなくなってしまったそうです。

＜幼児教育で伸びたのは「非認知能力」＞

●ヘックマンらの論文によると、就学前の教育を受けた子どもが最も伸びたもの、それは**学習意欲**をはじめ、誘惑に勝つ**自制心**や難解な課題にぶつかった際の**粘り強さ**などの**「非認知能力」**だったようです。論文では、「（IQ等の）認知能力よりもこれら非認知的な能力の方が実際の社会生活では重要とされることが多く、粘り強さや信

頼性、首尾一貫性は、その後の成績を予測するうえで最も重要な因子である」と指摘しています。ヘックマンの研究により、**幼少期の教育によって非認知能力は伸ばすことができること、**数字では測れない能力が、結果として学業成績の向上や将来の就業、ひいては職業人として成功するかどうかという点に繋がっていくということがわかったのです。

＜なぜ幼児教育の方が高等教育よりも教育効果が高いのか＞

●最後に、今まで述べてきたような大学・高校・中学・小学校の時期に比べ、なぜ幼少期の方が高い教育効果が得られるのでしょうか。その理由について藤森氏は次のように考察しています。

この時期の子どもたちには遊びと学びの区別が明確ではありません。遊びの中に学びがあり、**学びを遊びに変えてしまう能力**が子どもたちにはあります。これは就学前の時期に限ったことではなく、小学校低学年の時期にも当てはまることが分かっています。つまりこの時期に学習意欲や自制心の獲得、よりよい人間性の構築などの非認知能力を身につけることができれば、それ以降も学習に対して意欲的に取り組めるということです。

●この点、ふかさわミル保育園では従来から、いわゆる認知スキルの向上を意図した早期教育・先取り教育ではなく、異年齢集団での遊びや実体験をベースにした非認知能力の獲得をねらいとする保育運営を行っています。幼少期には潤沢にあり、以降は失われていくもの、それが「**遊び**」なのだとして、それが**人間の非認知能力を伸ばす入口**だとすれば、我々大人も、いつまでも学びを遊びに変える感性や柔軟さを持ち続けたいものです。

●次回保護者会では、非認知能力をキーワードに、質の高い保育の内容を掘り下げてみたいと思います。

＜保護者さまからのご質問をいただきました！＞

●前回（4月号）のコラムにおいて、「われわれ大人が一度身につけてしまった社会性という殻が温泉卵のようにふるふると柔らかくなる、感受性の扉が再び開かれる期間は、子どもが保育園に通っている今しかないのではないか」と書かせていただきました。この点について保護者さまから次のようなご質問をいただきました。コラムを発信していてこのような質問をしていただけることはありがたく、大変励みになるとともに、他の保護者さまでも同様の疑問を抱かれた方はいらっしゃったのではないかと思います。そこでご参考までにそのやりとりを紹介いたします。

Q ちなみにまだ私には見えていない世界なのですが、ゴールデンタイムはどうして保育園時期だけなのでしょうか？小学生になるとどう変わっていくのでしょうか？

A その理由は2つあると私は考えています。

〇1つ目は、「子どもがひたすら可愛いから」です。キュンキュンするからです。小学生になっても中学生になってもわが子はもちろん可愛いのですが、可愛さの質が変容するといいますか…。少なくとも、胸の奥をグッと鷲掴みされ、ジワアっとなるような、そういう感覚は、小学校以降は段々感じられなくなるのではないか、というのが私の親としての実感であり、また多くの子育ての諸先輩が語ることです。この胸の奥が「じわあっ」ととろける様な感覚を「温泉卵」と表現しました。

人は純粋に美しいものや清らかなもの、愛らしいものに触れたとき、日常の欲や罪悪感から離れ素直な気持ちになれたりします。その時に思い考えること、これが、「学び直し」ではないかと思うわけです。

〇2つ目は、「子どもが純粋に遊びに対して一所懸命だから」です。大人にしてみればなんでもないことに対して、この時期の子どもは

本当にびっくりするくらい純粋に、素直に驚いたり、泣いたり、頑張ったりしますよね。そんな子どもの姿を見ていると、大人になって忘れていた自分の感受性が揺さぶられるのを感じます。
〇これは対子どもに限った話ではありません。大人同士の人間関係でも似たような事がしばしば起こります。例えば、その道のプロやマニアと言われる人の話には、思いがけず引き込まれる魅力があります。これは、話し手の熱量が聞き手に伝わるからだと思います。熱伝導には媒介が必要というのが科学法則ですが、人の心に当てはめた時、この媒介となるのが、自分の心の中の感受性だと思います。火で例えると初めから自分の中にしまいこんでいた感受性という蝋燭に話し手の炎が引火し、心に火が灯るではないかと思うのです。
〇しかし、子どもがだんだん大きくなってくると、子ども自身にも社会性や防衛本能(失敗したら恥ずかしいから初めから頑張らないふりをするとか…)が育ってくるので、その化学反応がだんだん起こりづらくなるのではないか、というのが私の主張です。

★今後もコラムについての保護者の皆さまからの感想やご意見をお待ちしております。どうかお気軽にお声がけください♪

